

C年復活日 ルカ24章1―10節

〔直訳〕

- 1 だが週の最初に 深い明け方に
墓所の上へ 彼女たちは来た
運びながら 彼女たちが準備したところの香料を。
- 2 だが彼女たちは見いだした 石が墓から転がされているのを、
- 3 だが入って 彼女たちは見いださなかった 主イエスの体を。
- 4 そして 起こつた：
彼女たちが途方に暮れることにおいて このことについて
そして 見よ 二人の人が 彼女たちの側に立った まぶしい衣服において。
- 5 だがおびえて 彼女たちが
そして 傾けながら 顔を 地面のほうへ
彼らは言った 彼女たちに、
「なぜ あなたがたは捜す 生きている方を 死人たちの間に
彼はいない ここに、
そうではなく 彼は起こされた。」
あなたがたは思い起こしなさい 次のことを
彼が語った あなたがたに まだいながら ガリラヤに
- 7 言いながら
人の子が 次のことを **必要である**
引き渡されることは 罪人である人々の手の中へ
そして 十字架につけられることは
そして 三番目の 日に 起き上がることは「。
- 8 そして 彼女たちは思い起こした 彼の言葉を。
- 9 そして 引き返して 墓から
彼女たちは告げた これら すべてのことを
十一人に そして すべての残りの者たちに。
10 だが彼女たちはあつた
マグダラのマリア そして ヨハナ そして ヤコブの者マリア
そして 彼女たちと一緒の残りの女性たちで。
彼女たちは言っていた 使徒たちに これらのことを、

〔新共同訳〕

- 1 そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。2 見ると、石が墓のわきに転がしてあり、3 中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。4 そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。5 婦人たちが恐れて地に

顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。6 あの方は、ここにはおられない。復活なきったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。7 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」8 そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。

9 そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話した。

①構成

① 1―3節

⑦この段落では「見いだす」という動詞が肯定形と否定形とで繰り返される。石が墓から転がさ
れているのを「見いだした」ので、中に入ることができたが、あるはずのイエスの遺体を
「見いださなかった」というように、同じ動詞を繰り返すことによって、起こった出来事の奇
妙さを描いている。

② 4―7節

⑦4節の「起こった……において、そして見よ……」はルカが好んで用いる構文である。ここでは
「彼女たちが……途方に暮れていると、二人の人が……側に立つということが起こった」という意
味になる。この構文を使うことによって、物語が重要な場面にさしかかったことを暗示してい
る。

①二人の人の言葉の要点は「なぜ捜す、……彼は起こされた。……思い起こしなさい」ということに
ある。彼女たちは間違った捜し方をしている、なぜならイエスは起こされたからであり、その
間違いから脱出するために、ガリラヤで語ったイエスの言葉を思い起こさなければならぬ。

③ 8―10節

⑦二人の人の指示通りに「思い起こした」彼女たちは墓から引き返し、使徒たちに出来事を「告
げる」。

②彼女たちが見いだしたもの（1―3節）

①「彼女たち」は「イエスと一緒にガリラヤから来た」女性たちである（二三55）。「週の最初に、
深い明け方に」は、23章56節に女性たちは「家に帰って、香料と香油を準備した。……安息日に
は掟に従って休んだ」とあるので、「安息日が終わるとともに」の意味だろう。彼女たちが夜明
けとともに墓へ向かったのは、遺体に香料を塗るためであり、イエスへの愛がそうさせている。
彼女たちの思いは、死んだイエスに向けられている。

②当時、死者はまず香料・香油などで清められ、それから遺体は白い布で包まれ、顔は顔覆いで覆
われ、手足には包帯が巻かれた。ヨハネ福音書は、イエスがその日のうちにこの習慣通りに埋葬
されたことを明記している（一九38以下、二〇7）。しかし、マルコ福音書とルカ福音書による
と、安息日の始まりが近づいていたので、とりあえずイエスの遺体を亜麻布に包んで仮埋葬を行
い、安息日が明けてから、正式な埋葬をしようとしたように受け取れる。マタイ福音書は香料の
ことは一言もふれていない。

③ たどり着いた墓で彼女たちは異常な事態に遭遇する。墓から石が転がされているのを「見いだした」ので、中に入るが、あるはずのイエスの体を「見いださなかった」からである。

③二人の人のすすめ（4―7節）

① 女性たちが途方に暮れていると、「二人の人」が側に立つ。イエスの変容のときにも（九30）、また昇天のときにも（使一10）、「二人の人」が登場する。彼らは「まぶしい」衣服を着ているから、天上の存在と考えてよいと思われる。イエスの受難と復活と昇天の場面に「二人の人」という表現が現れるのは、これらの出来事が密接な関連を持っており、いずれも神による出来事であることを示すためである。

② 「おびえて」と直訳した語はエムフォボスであり、「恐れる・驚き恐れる・恐れおののく」などと訳される。エムフォボスは、「エン（中に）」と「フォボス（恐怖・畏敬）」という語からなり、「恐れる」と「畏れる」の両方の意味がある。神とキリストと天使に対しての用例（ルカ二四5・37、使一〇4、黙一一13）では、両方の意味が含まれているだろう。

③ 女性たちは死んだイエスに会うために墓に来たが、遺体を見つけれずに途方に暮れている。「二人の人」は彼女たちに「なぜ死人たちの間に捜すのか」と問いかける。彼女たちが墓に来たのはイエスを「捜す」ためではなく、その遺体に香料を塗るためであり、亡骸に最期の別れを告げるためである。しかし、「二人の人」はあえて「捜す」という語を使うことによって、イエスを死者と決めて行動する彼女たちの思い違いを指摘する。すでに「生きている」イエスは「ここ」、死者のための場所である墓にはいない。「彼は起こされた」からである。

④ この「起きた」はもちろん復活を意味している。受動態が使われているが、これが自動詞の意味であるなら、新共同訳のように「復活なさった」の意味である。しかし、神が動作の主体であることを婉曲的に表す受動態であれば、「神が彼を復活させた」という意味である。聖書が語る復活とは、この世の命を取り戻すということではなく、自分では起き上がる力を失くした人を神が起こすこと、まったく新しいのちを与えることである。

⑤ 「二人の人」は彼女たちが困惑から脱出するためにイエスの言葉を「思い起こしなさい」と指示する。7節はそのイエスの言葉を述べているが、主動詞は「必要である」である。この動詞は、神の計画であるが故に必ず起こる出来事を言い表す。必ず起きる出来事とはイエスが「引き渡されること」、「十字架につけられること」、「起き上がること」である。神にはこれらのことを通して、実現しようとしている計画がある。それは私たちの罪の贖いであり、新たないのちへの招きである。

⑥ イエスは「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」と言い、罪人こそが神の救いに真っ先にあずかる人々であることを明らかにした（ルカ五32）。しかし、イエスがその手に引き渡される「罪人」は「神に背く者」を意味している。罪人の手に「引き渡される」、「十字架につけられる」は神的受動態と解されるが、「起き上がる」は能動態である。第一回目の予告（九22）では、6節と同じエゲイローの受動態が使われ、第三回目の予告（一八33）では、7節と同じアニステーミの能動態が使われている。異なる伝承によるのかもしれない。

④彼女たちの反応（8―10節）

⑧ 8節で「言葉」と直訳した語はギリシア語のレーマである。この語は「語られること・言葉」という意味のほかに、「事柄・出来事」の意味でも用いられる。イエスが語った言葉は出来事となつて現れた。目の前の不思議な出来事を見て途方に暮れていた女性たちは、「二人の人」の指示した通りに、イエスが語った言葉を思い起こす。

⑨ イエスの言葉を「思い起こす」ことによって、彼女たちに変化が生じる。墓へ向かった彼女たちは方向を転換し「墓から引き返して」、この出来事を弟子たちに「告げ」る。墓へと向けられていた彼女たちの関心は、イエスの言葉によつて方向を変えられる。彼女たちはイエスの言葉を「思い起こす」ことによつて、目の前に起こっている出来事の意味を理解する。だから、「思い起こす」といっても、単なる想起ではない。むしろイエスの言葉が深い現実味をもつて、生き生きと響き始めたことを意味している。

⑤ 告げる者へと変えられる

⑩ 墓が空であるという目の前の出来事に困惑し、その意味が分からずにいる女性たちを「二人の人」の言葉が導く。救いの出来事は人の理解をはるかに超えるものであること、神だけが与えることのできる復活の意味を知るためには、天からの助けが必要であることが示されている。

⑪ しかもこの出来事はイエスの言葉の通りに起こったものであり、イエスの言葉を思い起こすことによつてその意味を知ることができる。自分の理解の中に入り込むなら、途方に暮れるだけであるが、外（天）からの指示に聞き従い、イエスの言葉を思い起こすなら、人は不思議な出来事の中に神の救いの業が現れていることに気づくことができる。

⑫ イエスの復活は誰にとつてもにわかには信じることができない不思議な出来事であることは、11-12節に使徒の反応を描くことでさらに強調されている。使徒たちには女性たちの言葉がたわごとのように思われ、彼女たちを信じようとしなかった。しかし、ペトロはその証言を自分の目で確かめようとする。彼は起き上がつて墓に走り、亜麻布だけを目にする。ペトロは確かにまだ信じてはいないが、「不思議に思いながら」帰っていく。「不思議に思う・驚く」を意味するサウマゾーの用例は福音書、特にルカ福音書に多く見られる。そのほとんどが、人間の理解を超えた神の救いの業に対する人々の反応を表す表現として用いられている。ルカ24章41節でも、復活のイエスが弟子に現れた場面で「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので」と用いられている。

⑬ 女性たちには「イエスの語ったことを思い起こしなさい」という天からの指示が与えられるが、女性たちの言葉を聞いた使徒たちには与えられていない。彼らがイエスの復活を信じるようになるのは、イエス自身が復活の体をもつて彼らに出会うときである。エマオへ下る二人の弟子は、一緒に歩く人物がイエスだと気づかない。しかし、彼らはイエスが聖書を説明した後、パンを裂いたときにイエスだと気づく。彼らがエルサレムに戻ると、同じころ、シモン・ペトロにも復活の主が現れていた。その後、復活のイエスは弟子たちの前にも現れるが、復活を信じられず不思議がる弟子たちの心の目を開いて聖書を悟らせる。

⑭ 福音は誰にとつても当初は「信じられない」ものである。しかし、その真実を知つて「驚く（不思議に思う）」ようになり、ついには「告げる」者へと変えられていく。この転換を作り出すのはイエスが語る言葉である。イエスの言葉に聞き続けること、その言葉を思い起こして身を合わせ生きてるとき、教会の宣教が始まる。